- **「私の人生初めての手術が心臓外科手術」**

　私は自営業（建設業）を、父親の後をどうにか継いで今日までやって来ました。カゼで二日、三日ぐらい家で休んだ事ぐらいはあっても病院に入院した事がなかった。今回の心臓血管病も一日ゴルフを楽しんで家に帰りビールを少々飲んだ後、次男が胆石で他の病院に入院をして居ましたので、そこへ見舞いに行った時、気分が悪くなり、トイレに行き、もどしました。すると気持ちの方は一時おさまりましたので、妻と一緒に家に帰る様に言い、車に乗せていただき家の方へ向かいました。
　途中まで来たら、胸のあたりが苦しくてたまりません。その時私は妻に言いました。「今回の苦しみはちょっとちがう。さっそく家に帰りフトンの中で休みたい」と言った。妻は私を乗せて一生懸命に家の方へ向かった。だが私の事が気になり、途中かかりつけの町医者に寄った。（夜八時頃）お医者は、すぐに徳洲会病院に行きなさいと言われ、そのまますぐに病院に向かった。病院に着いた時は八時十五分頃に思った。手続きをすこし待ち、すると大橋先生が見え、すぐに手術を行います。「なんと運の良い事だろうと後で気が付きました。」私は胸が苦しくてたまりません。なんとか早く楽になりたい気持ちでいっぱいです。こんな身を先生におまかせし、カテーテルという治療を行いました。それをしていただいた時は胸がす一っとして来て、本当に気持ちが楽になり、その後集中治療室で看病をしていただき、（三日程）一般病棟にもどって来ました。その後、心臓血管外科手術を行う事になり、（手術日は十一月十一日に決定）手術に必要な色々な訓練がありました。
　手術は順調に終わり、集中治療室を五日程で出て、今度はもとの四階の一般病棟に移り、二回目の病院生活が始まりました。健康な時には知らずに毎日を送って居ましたが、病院に入って健康の有り難さがわかりました。今回の心臓血管外科手術も急になって来て私もびっくりしました。なんと言っても健康でありたいという事が良くわかりました。これからも健康には十分気をつけて頑張ります。

- **（無題）**

　救急で徳洲会病院にかつぎこまれて、即心臓バイパス手術を受ける結果となりました。この様な状態になる経過は職業柄不規則な生活を余儀なくされ、二十年前から高血圧症の治療を続けていましたが、十年前に単身赴任先で狭心症にたおれたのが第一回目でした。
　カテーテル造影検査で右冠状動脈が詰まっていることが判明しました。その時は仕事の都合もあって、薬による治療でしばらく様子をみることにして、十年が経過しました。職業柄、食事制限等は社会生活を続けることは非常に難しく、結果的に冠状動脈に負担をかけ続けることになりました。
　今回は倒れる前日、帰宅時に息苦しい（百ｍを走った時に起る胸の苦しみのようでした）発作に見舞われましたが、何とか家にたどりつきました。しかし、翌日の早朝再び前日のような発作が起こり、救急車のお世話になった次第です。身体にメスを入れることについて、仕事、家族のことが心によぎり、迷いましたが、心臓血管外科部長の大橋先生を信頼して手術に踏み切りました。十時間に及ぶ長い戦いでしたが、気がついた時は集中治療室のベットの上でした。その後の回復は想像を上り、四日目には一般病棟に移り、十日間で退院、十二日目からは様子を見ながら会社に復帰することができました。外科的手術とはいえ、現代医学の技術力には感謝しています。
　入院中は婦長を始め、看護婦の皆様には心温まる手当を受けて本当にありがとうございました。術後九ヶ月を経過、精神的にも立ち直り、不安ない通常生活を送っています。激しい動きにはどこかに不安を残していますが、無理をせず、頑張ってゆきたいと思います。

- **「患者の寿命も医者次第」**

　定年後の生活は、前回心臓病で倒れる迄、危機感のない平穏な生活を送っていました。自分のまわりにはいろいろと危険な事があることは承知していても、それはあくまで本で読んだりテレビで見たり、話しに聞いたりして知るだけで、自分の生活は、ちゃんとそうしたものとは別のところで確保されていると思っていました。
　しかしある日突然倒れました。青天の霹靂とはこの事です。貴院の適切な治療により元気になりました。　勉強不足を痛感し図書館へ熱心に通いました。そうした折り、肝臓に影があると言われ、血管造影を指示されました。心臓のほうはその後どうかなという思いがチラッと頭をかすめました。一緒に心臓の方も検査してもらうようにお願いしました。結果は肝臓はともかく心臓が危機状態であり、即入院、手術と決まりました。検査が終わり、一旦家へ帰れると思っていましたので、即入院、手術と決まると俺はそんな重病かなという思いが心を占め、葛藤と戦いました。
　六月一日手術と決まる迄は、連日に渡りＣＴ、心エコー等が実施されました。手術までと、その後の日程表により出来るだけ歩く事と指示されていましたので、廊下を一周が約九二〇ｍ、毎日一〇周を、手術までの八日間実施しました。病室では毎日呼吸の仕方、吸う、はく、の練習を器具を使い確実に行いました。（その練習は手術後に大変役に立ちました）手術前には大橋先生、坂本先生、田崎婦長、それに家内で、別室にて図解入りで丁寧に且つ詳細にわたり親切な説明を受けました。これにより不安、心配が殆どなくなりました。家内、娘夫婦、孫二人で滋賀県の多賀大社へ私の病気平癒の祈祷をお願いにゆきました。そして大切なお守りを受けて来てくれました。孫二人からは、「おじいさん、絶対死んでは駄目だよ、生きて元気になったら魚、虫、ザリガニを取りにゆこうね」「僕（孫）の小さい時（幼稚園のころ、現在は小学二年生）、おばあさんと一緒にねた時、やさしい人は早死にするが、頑固な人は長生きする」ときかされた事を思い出したのか、「おじいさんは両方の性格を持っているから大丈夫、頑張ってね」と、励ましのＦＡＸを送って来ました。目頭がジーンと熱くなりました。闘いの始まり六月一日朝、準備をしてストレッチャーに乗せられ手術室へと向かいました。麻酔をかけられ手術開始、後は全くわかりません。その間、約八時間、家内は娘と二人待機室でジーッと時計の針が廻るのを待っていました。名前を呼ばれ、ボンヤリした頭でああ終わったな、生きているんだな、と思いました。二日目からは、お粥ながらも御飯も出て来ました。喉が渇いて喉が渇いて仕方がありません。水は制限されているので飲めません。氷をもらい、喉、口をうるおした毎日でした。特に夜間が昼中に比べよく渇きました。痰もよく出ました。平ぜいは殆ど出ませんが、手術のせいでこれもよく出ます。練習したおかげで、無事乗り切りました。ＩＣＵにいて一番の喜びは家内が三回の面会時間のうち一回面会に来てくれたことです。病院から五分の近くでもなかなか実現しません。これが現実です。ＩＣＵの人達の手厚い看護のおかげで順調に快復へと向かいました。私の評価ではその技量、態度等貴院のピカーであると思います。林婦長をはじめスタッフの方達のたゆまざる研鑽の賜物と思われます。ＩＣＵに別れを告げ、指定の病棟へと向かった。大橋先生、坂本先生先生には毎日毎日病室迄出向いていただいて傷口の手当等に加え、「どうですか？」と尋ねられ、適切な指示を与えられ、力強い激励の言葉で元気を与えて下さいます。約八時間前に入院した時と比較して看護の密度等が一段と向上しているように感じました。静養の日々が過ぎ、退院してもよいと許可が出ましたが、家内は「まだ早過ぎる、もう一週間位病院にお世話になるように」と希望を述べますが、私としては夜安定剤をもらっていても夜中の二時頃には決まって目が覚めてしまいます。図書館で睡眠は七時間を原則としてそれ以下六時間それより八時間以上でも死亡率が高いと統計が確率されていることが、目にする本に度々出ていますので、私としては出来るだけその数値に近づけたいと願っています。貧しいながらも住みなれた我が家へ帰ることにより、眠れない問題も解決されるのではないかと思い、色々御世話になった皆様には感謝の念で一杯の気持ちを胸に我が家へと向かいました。
　退院後の出来事、高齢化社会が怒濤の如く日本中に押し寄せ、介護保険が実施されました。かつて戦後苦労して働いて世界の経済大国に押し上げた我々は高齢化、高齢化と叫ばれる声に埋没して肩身を小さくして生きてゆかねばなりません。寄る年波と共に、かつて血気盛んな頃と違い、少しの元気づけ、気配りは大変心にしみて有難く思います。　退院後七日もたってからの田崎婦長からの病状の様子の丁寧な問い合わせには正直いってびっくりしました。私の話す事柄に一つ一つ親切に的確なアドバイスをいただき感謝しています。

「集中治療室窓辺から桜花鑑賞」

それは平成十二年三月二十五日（土）の寒い日でした。出勤時と帰宅時に胸が少し苦しく気になっていましたが、夕食後、再び同じ症状となり、いつもとは違う苦しさでしたが、女房に「明日は休みだから風呂に入って寝れば治るわ」と言っていたのですが、医者に行った方が良いと言われました。午後八時半頃、診察時間外にもかかわらず徳洲会病院へ、女房とタクシーで出掛けました。待合室にいる間に、あぶら汗が額に出るわ、気分は悪くなるわで、診察が始まる前に激しく嘔吐致しました。先生はこのまま入院して明日詳しく検査をした方が良いと言われ、よもやの初入院となりました。翌日、カテーテル検査によれば、「狭心症による冠動脈バイパス手術」が必要で、６ヶ所つなぐと説明があり、重症でした。手術の成功率も高く心配ないとの話で、私としては全てを主治医の先生に委ねる外がなく「まな板の上の鯉」で、心境の変化はありませんでしたが、家族はかなり動揺したのではないかと思いました。三月三十一日手術と決まり、毎日いろいろな検査が行われました。手術日前日に外の患者の手術が長引いたことと、先生のご都合で四月四日に変更となって、その気になっていたのですが、仕切直しとなりました。

「さあ、手術室に行きますよ」とベットで運ばれる途中までは記憶がありましたが、気がついた時は集中治療室で口から喉のあたりまで器具のような物が入っており、口は開いたまま、手足をベットに固定され、名前を呼ばれ先生から手術は成功でしたよと言われても、感謝の言葉も言えず、うなづくだけの状態でした。一日で一般病室へ戻れる予定でしたが、五日間の滞在は辛抱あるのみでした。肺に痰が溜まっていることがわかり、肺炎の併発を心配されたようでした。別々の機器で二度にわたり腹部からの取り除き処置が行われました。ほかに、口、鼻からクダで痰、つばを吸い取る処置は堪え難い苦痛でした。窓の外は桜が満開でスタッフの方のご親切で鏡を借りてのぞいたり、ベットの位置を替えて頂いて鑑賞したりして一時の安らぎを得ました。本来なら毎年ＪＲの高蔵寺駅ホームか電車の窓からこの桜を眺めておりました桜でしたが、一般病室に戻る日、身体についていたクダ、口の中に入っていた器具がはずされ身体が自由となり本当にほっとしました。一般病室に戻り、病室から点滴を引っぱって五m程度のトイレ迄行くのが息が上がり身体がふらつく感じで非常に不安でした。一日毎に慣れて来ましたが鼻からの酸素吸入が取れた時は、自分の力で呼吸をする、あたりまえの事が胸がゼイゼイ音をたてているように聞こえたり、息が切れそうに感じたりしたときに、これからは、自分の強い意志で身体を回復させるのだと行動しなければダメだと思いました。

常に痰を出すよう吸入器を使ったり、咳と共に出すようティッシュを山ほど使いました。咳き込む状態が続き特に身体を横にすると咳き込むので、夜眠れなくて、軽い睡眠剤を飲むのですが、午前一時頃にトイレで目が覚め、それから朝まで眠れない日が続きました。食事も全部食べれるようになり、点滴もとれ、身軽になり、咳き込みも少しずつ減り、日に日に快復が感じられるようになって、退院は四月二十七日と決まり、一ヶ月の入院生活は終わりを迎える事になりました。

タクシーで我が家に着くやいなや一ヶ月ぶりのシャワーで胸の傷口を除いて入念に垢を落としました。次は床屋さんまで歩けるか心配でしたが、どうにか整髪を済ませ、やっと落ち着くことが出来ました。体調については、体重が五十kg（平常時五十八kg）に減ったままであり、身体を動かす毎に息が上がり「ハアハア」となり、座って居て立ち上がった時は、立ちくらみはするし、特に一階から二階に上がるだけで息が切れるのには驚きました。言葉も長く話せないし、食事も味が正常に感じられない。胸の傷口も咳をすると痛む。この状態で明日から過ごすのは、自信はありませんでしたが、職場復帰を六月一日にする事を目標に掲げ、意識的に体を動かし、ウォーキングを行い頑張ろうと決意しました。リハビリは、庭の片隅での家庭菜園で体を動かしたり、近くの公園等へのウォーキングと毎日繰り返し体力回復に励みました。体調は日一日と快復、五月二十四日、二回目の診察も異常なし、明日は、目標通り出勤する事になりましたが、本当にこんなに早く回復出来るとは思いもよりませんでした。

尽きたかともしれない命を、大橋先生を始め大勢のスタッフの方々のご尽力により生き返ることができました。その思いに報いるためにも、これからは前より一層の健康留意に努め、意義のある毎日を過ごしていきたいと思っております。

「術後の会 ご案内」

名古屋徳洲会総合病院において手術に対する需要も増加するとともに、手術後の患者様もますます増えてきました。当院職員一同手術をさせていただくだけでなく、手術後のきめの細かいケアをさせていただく責任を感じております。　つきましては、心臓（血管）病を克服あるいは闘っている患者様同士の親睦を深める意味で、術後の会を開かせていただくことになりました。山と渓流の別天地とも言われる、定光寺の千歳楼にて昼食を食べながら、心臓血管病、心臓血管手術、生活習慣での注意に関する医療講演を行なう予定にしております。　尚、詳細につきましては個別でご案内を差し上げる予定にしています。ご多忙中恐縮とは存じますが、万障お繰合わせの上御出席下さいますようお願い申し上げます。

１、日時　１０月７日（土）　　午後１時
２、場所　千歳楼
３、会費　２,０００円
４、問合せ先　地域医療部　　古田、中島
心臓血管外科術後の会　　幹事　古田
（０５６８）５１－８７１１ 内線３６１

部署紹介　「こちら四階南病棟です。」

四階南病棟は、内科循環器病棟です。急性期の病棟のため、患者様の入院も多く、看護婦も毎日走りまわっており、決して静かな病棟とは言えません。

心臓血管外科の患者様は、緊急に手術された方、手術目的で入院される方、検査目的で入院されその結果、手術になる方が主です。「手術が必要です」と医師から言われたとき、恐怖、不安、どうして自分が・・・・出来れば、この現実から逃げたいという心境ではないでしょうか。患者様だけではなく、ご家族の思いも同じかと思います。

看護婦の業務として、手術の前日に手術前処置というのがあります。それは、剃毛（手術部位を広範囲に毛を剃ること）、抗生物質のテスト等をさせていただきますが、その時には、「まな板の上の鯉」の心境だと聞きます。そして手術当日を迎えられる。

手術が終了し、ＩＣＵ入室、数日が経過し、私たちの病棟に戻られる時には、手術後たくさんの管が入っていたものも抜け、食事も食べられ、自分で歩ける状態まで回復されており、手術という荒波を乗り越えられた人の強さも感じさせます。

「お帰りなさい。」「ご苦労様でした。」と出迎え、それから十日程すると、退院。元気に退院されていかれる姿を見ることが何よりも私たち看護婦の喜びであり、エネルギー源になります。　今後もたくさんの患者様との出会いがある中、四階南スタッフ一同、患者様とご家族が安心して療養生活が過ごされるよう、日々看護に努めさせていただきたいと考えます。　四階南病棟 婦長　田崎　奈美枝